みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

On the Ethnological Museum of Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 俊亀智 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004437

アチック・ミューゼアムのあとに
——財団法人日本民族学協会附属民族学博物館のこと——

中　村　俊亀智*

On the Ethnological Museum of Japan

Shunkichi NAKAMURA

In 1938 the Ethnological Museum of Japan was founded at Hoya-machi, Kitatama-gun, Tokyo, by the Japanese Society of Ethnology.

The inventory of the museum included specimens from Sakhalin, Thailand, Laos, Cambodia and Indonesia, collected by members of the Society. These collection were later absorbed into those of the National Museum of Ethnology. This article analyses trends in specimen accumulation by the Ethnological Museum of Japan.

Ⅰ. 報告の主旨
Ⅱ. 全体的推移
Ⅲ. EMの3時期
Ⅳ. まとめ

Ⅰ. 報告の主旨

1938年8月，東京北多摩郡保谷町下保谷（現在保谷市東町）に日本民族学会附属民族学博物館（のちに財団法人日本民族学協会附属となる。以下 EM という）が完成した。木造平家建て347.75坪。4つの陳列室と5つの収蔵室，3つの整理室，それに宿直室などをそなえた，おおきな建物だった。やがて1921年以来東京三田綱町（港区）の渋沢氏邸内におかれていたアチック・ミューゼアム（以下AM）の標本資料と研究陣がそこに移ってきた。

* 国立民族学博物館第5研究部

実質上 AM を引きついだ EM が，その後どのような足どりをたどったか。それについては学界全体の動きともからみあわせて，すでに紹介されているが [石田　1959: 1404–1411]，数字の裏づけをともなう資料はこれまでほとんど公にされていなかったといってよい[1)]。

この報告は AM·EM の収蔵資料の基本台帳としての『民具標本収蔵原簿』（民族学振興会所蔵，以下原簿という）にもとづいて，AM 以後，EM が標本資料をどのように集めていったか，それは EM の動き，学界の動きとどのようにかかわりあうものだったかを，あきらかにしたものである。

原簿はかならずしも収集されたとしの順には書きこまれていないので，また書き方には（およそ半世紀にわたるあいだのことである人手不足，試行錯誤の時代のこと，書き方の統一もなされなかったからであろう）精粗があり全体の移りゆきをよみとるには不便なので，原簿をもとにして簡易体の目録原稿をつくり，コンピュータ処理によって編年体目録（以下目録）を作成した。

ここでは，とりあえず原簿の番号10,000からあとの部分をEMのものと考え(10,000以前にも創設の1938年前後のものが含まれているが，それはとりあげない)，その部分をつぎの方針で目録化した。

a.「いつ」 原簿にはその標本資料がいつ集められ(採集年月日)，いつ収蔵されたか（収蔵年月日）についての項目があるが，ここでは EM の動きのおおよそを知るために収蔵年月日（収集年月日）から年次のみをとった。

b.「どこで」 原簿には採集地の項があり，国内用に都府県郡市町村大字・字を書く場所が用意されているが，国内のものでは都道府県，国外では附表1のような地域区分に着目した。

c.「だれが」 原簿ではその標本資料を集めた人の名と寄贈した人の名とが書きこまれているが，ここではその標本資料に価値をみいだし，それを EM にもたらした人を大切に考えて採集者（収集者）だけをとりあげた。

d.「なにを」 原簿では標準名，地方名，分類番号の3つの欄があり，分類番号欄

1) EM の動きはそのつど学会の機関誌『民族学研究』で紹介された。たとえば「民族学博物館におけるアイヌ住居の建設について」(14巻4号）や「民族学博物館について」(14巻1号）は宮本馨太郎先生執筆。民族学研究編集部の名で「1951年度民族学博物館事業報告」(16巻3・4号)，「民族学博物館だより」(19巻2号，20巻3・4号，21巻4号)。EM では1950年から3年継続で文部省科学研究費による「我が国庶民生活文化の民族学的調査研究」がおこなわれたが，その関係記事もまた『民族学研究』誌上にみえる。たとえば八幡一郎先生の「縄文式後期の極小土器について」(14巻2号)，「竪杵の分布図の作製について」(15巻1号)。宮本馨太郎先生の「民族学博物館所蔵民具標本の写真図録及び測定・採集記録の作成について」(14巻3号）などがそれである。

は慎重をきして最終的に分類法確定の日まで書きこまないことにしていたが，ここでは標準名をもとにして一般的な名前をとりあげた。その際，原簿ではむずかしい名づけ方や適切でないいい方があったので，思い切っていいかえることにした。それをもとにして，ここでは附表2の AM 民具分類にしたがって分類コード（2桁）を与えた。AM 民具分類ははじめ国内用につくられたものだが，ここではそれがひとまず国外の標本資料にも適用できるものとして，AM の民具分類にはない90番（出土品，武器など）をこしらえた。AM ではワラジならワラジの形態上の分析を研究のひとつの柱にしていたため，それに便利なように，信仰や儀礼につかわれる衣服や食器などを，まず衣食住の関係の項目にいれる分け方をしていたので，ここでもひとつの目やすとして，分類は1標本資料1回限りとし（いわゆる重複はさけた），衣食住の項，ないしは生業関係の項に厚く，その他の項には薄い分け方をしてみた。

また，ここでは原簿のひとつの番号（台帳番号）でまとめられている標本資料を1件（たとえば1足の草履にひとつの番号がついていればそれを1件，片方ずつ2つの番号がつけてあったとしたら，そのときは2件）と数えた。

e.「なぜ」どのような標本資料を集めるかは，集める人の関心のおき方，解決すべき問題のたて方によっておおきくかわってくる。ここではその標本資料がどのような動機で集められたかを思いかえしながら整理してみた。

現在，EM旧蔵の標本資料についても実物と照らしあわせてカードがつくられつつある。その結果によって今回の目録でわからなかった部分が，あるいはわかってくるかもしれないし，数字の上でもより正しい結果がえられることになろう。この目録はそうした作業をすすめる上での参考になるように工夫してみた。したがって以下の数字はその作業によってかわるかもしれないが，大勢はたぶんかわらないように思われる。

f. 原簿の標準名から分類しにくいもの，採集地や収集年次がとくに疑わしいものは，ここではあけておいた。反対に，たとえ空欄でも前後の記載から年次が判断できるものは，年次を推定した。

Ⅱ. 全体的推移

としとともに EM にはどれほどの標本資料が集められたか。その有様をあきらかにするために，目録から各年次の標本資料の収集件数をしらべ，その累積数を求め，それが EM 最終年次の1962年11月までに累積された分量のどれだけにあたるかを確

表1　EM 標本資料の累積

地域 / 年次	件数				Aに対する割合		1938年以後の累計(率)					
	不明	国内	国外	計(A)	国内%	国外%	国内	国外	(A)	国内%	国外%	A%
不明	124	807	75	1006	80.2	7.5						
1937まで		5	1	6	83.3	16.7						
1937		1		1	100.0	—						
1938	1395	582	1092	3069	19.0	35.6	582	1092	3069	20.9	30.1	36.6
1939	8	28	418	454	6.2	92.1	610	1510	3523	21.9	41.6	42.0
1940		2		2	100.0	—	612	1510	〃	22.0	〃	〃
1941			36	36		100.0	〃	1546	3561	〃	42.6	42.4
1942				0		—	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1943		35	43	78	44.9	55.1	647	1589	3639	23.2	43.8	43.4
1944				0		—	〃	〃	〃	〃	〃	〃
1945	4	3	338	345	0.1	97.9	650	1927	3984	23.3	53.1	47.5
1946				0		—	〃	〃	〃	〃	〃	
1947				0		—	〃	〃	〃	〃	〃	
1948				0		—	〃	〃	〃	〃	〃	
1949				0		—	〃	〃	〃	〃	〃	
1950	11	82		93	88.2	—	732	〃	4077	26.3	〃	48.6
1951	97	209	3	309	67.6	1.0	941	1930	4386	33.8	53.2	52.3
1952	57	38	36	131	29.0	27.5	979	1966	4517	35.2	54.2	53.8
1953		72	92	164	43.9	56.1	1051	2058	4681	37.8	56.8	55.8
1954		152	116	268	56.7	43.3	1203	2174	4949	43.2	60.0	59.0
1955	2	159	57	218	72.9	26.1	1362	2231	5167	48.9	61.5	61.6
1956	7	74	6	87	85.1	6.9	1436	2237	5254	54.6	61.7	62.6
1957	152	68	215	435	15.6	49.4	1504	2452	5689	54.0	67.6	67.8
1958	214	428	408	1050	40.8	38.9	1932	2860	6739	69.4	78.9	80.3
1959	6	152	452	610	24.9	74.1	2084	3312	7349	74.9	91.3	87.6
1960	25	195	260	480	40.6	54.2	2279	3572	7829	81.9	98.5	93.3
1961		200	51	251	79.7	20.3	2479	3623	8080	89.0	99.9	96.3
1962	2	305	3	310	98.3	1.0	2784	3626	8390	100.0	100.0	100.0
計(B)	2104	3597	3702	9403	38.3	39.4						
%	22.3	38.3	39.4	100.0								
10,000まで	155	6315	1272	7742								
＋(B)	2259	9912	4974	17145								
%	13.2	57.8	29.0	100.0								

かめてみると表1，図1のようになる。同じようにして国内と国外とを別々に確かめると図2がえられる。

各年次の収集件数のうち，1938年の分は，のちにとりあげるように EM の前身としての AM からのもちこしが大部分をしめるから，ひとまずその分は AM の仕事の後片付けと考えて，純粋に EM が集めた部分の移りゆきをみるために，その部分

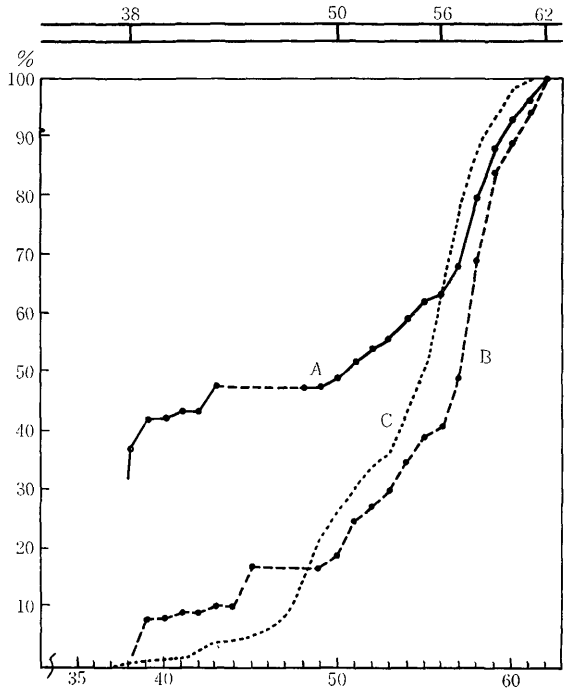

図1　EM 標本資料の累積過程
A は全体数の累積
B は1938年を起点としたときの累積
C は AM の累積

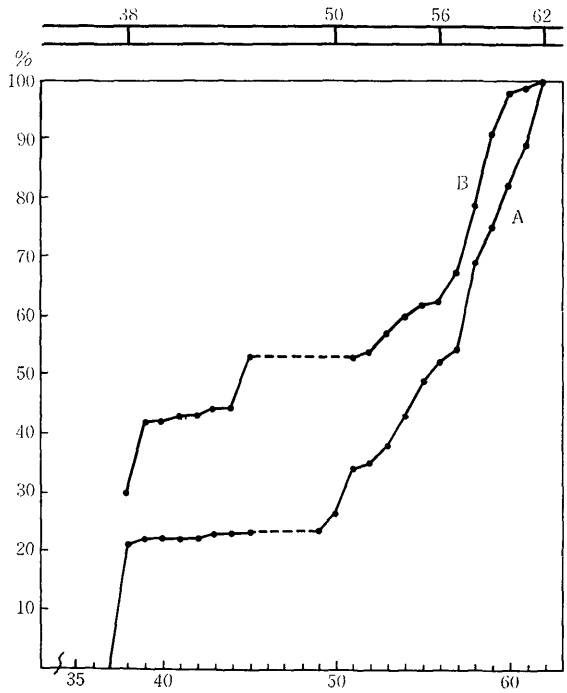

図2　EM 標本資料の国内国外別累積過程
A は国内
B は国外の累積を示す

を差しひき，改めて1939年以降についての累積の割合を出してみたのが図1のB線（点線であらわしたもの）である。

図1B線からみて，もし資料の集まり具合がEMの活動のひとつのあらわれ，同時に資料の集まりが学問の深まりのひとつのあらわれだとすれば，EMの足どりには，つぎの3つの段階が考えられる。

a．第1期（前期）　EM発足の1938年から戦争による停滞を含む1950年まで。

b．第2期（中期）　再び累積率が上昇しだした1956年まで。

c．第3期（後期）　累積がいっそう急成長する1962年まで。

ちなみにこの図をもとにして各時期の年平均増加率を目算してみると，第1期1.7，第2期3.3，第3期10となり，いまさらながらEM後半の上昇率におどろかされる。

なおこれをAMの場合（図1C線）と重ねあわせてみると若干AMのほうが急であるが，線の形はよく似たものとなる。

ただしAMとEMでは標本資料の内容のあり方におおきな違いがあり，AMでは国内収集の標本資料81.6%，国外16.4%だったのに対し，EMでは国内関係は38.3%，国外はそれよりやや多い39.4%という数字を示す。原簿に収集地が明記されていない標本資料の割合はAMの2%に対し，EMは1938年のもちこし分のなかに未整理のものがたくさん含まれていたためもあって22.3%となる。

以下EMの実際の動き，学界の動きなどともからみあわせながら，各時期の様子をややくわしくみてゆこう。

Ⅲ．EMの3時期

a．第1期（1938年—1950年）

この時期のはじめ，AMの民具収集のあとを受けて，ひきつづき国内の標本資料が集まりつつあった。その範囲は表2Aのように42都道府県におよんだ。民具研究のうえからも，この時期は画期的な時期にあたっていた［宮本　1973：204］。

しかしそれ以上に目立つのは海外から集められた標本資料の増加だった。1938年，この時期から国外のそれがきわだって高い割合を示すようになる（図2）。それは日中戦争から太平洋戦争への時代のひとつのあらわれだったかもしれないが，表2Bによってうかがえるように、直接的には専門の研究者による旧植民地での調査にともなう標本資料の収集におおきく左右されていた。

たとえば目録をもとにして，この時期にかなり大量に標本資料を集められた人たち

表2A　EM 地方別標本資料収集件数（国内）

地方／年次	不明	北海道	東北	関東	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州	沖縄	計(A)	%
不　明	124	3	301	160	42	89	30	20	38	73	51	931	16.3
1937—1942	1403	18	95	83	257	50	25	16	11	40	18	2016	35.4
1942—1947	4	38	—	—	—	—	—	—	—	—	—	42	0.7
1947—1952	108	58	195	14	5	3	—	2	1	13	—	399	7.0
1952—1957	66	27	34	149	61	51	16	8	5	76	68	561	9.8
1957—1962	397	36	176	310	174	226	23	19	2	69	8	1440	25.3
1962	2	7	26	182	49	22	8	8	—	3	—	307	5.4
その他	—	—	1	—	—	—	2	—	1	1	—	5	0.1
計(B)	2104	187	828	898	588	441	104	73	58	275	145	5701	100.0
%	36.9	3.3	14.5	15.8	10.3	7.7	1.8	1.3	1.0	4.8	2.6	100.0	—
10,000まで	155	61	1057	1283	603	1092	436	506	297	814	166	6470	
%	2.4	1.0	16.3	19.8	9.3	16.9	6.7	7.8	4.6	12.6	2.6	100.0	
+(B)	2259	248	1885	2181	1191	1533	540	579	355	1089	311	12171	
%	18.6	2.0	15.5	17.9	9.8	12.6	4.4	4.8	2.9	8.9	2.6	100.0	

表2B　AM 地域別標本資料収集件数（国外）

地域／年次	朝鮮半島	中国大陸	台湾	モンゴル	サハリン	シベリア	東南アジア	南アジア等	ヨーロッパ アフリカ	アメリカ大陸	ミクロネシア	ポリネシア オーストラリア	計	%
不　明	14	—	30	—	—	—	2	—	1	—	28	—	75	2.0
1937—1942	82	84	541	—	348	—	119	—	3	—	347	22	1546	41.8
1942—1947	—	1	5	—	43	—	317	—	—	—	3	12	381	10.3
1947—1952	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	0.1
1952—1957	1	59	6	—	46	—	2	63	98	32	—	—	307	8.3
1957—1962	1	129	7	—	—	—	614	528	6	71	6	24	1386	37.4
1962	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—	3	0.1
その他	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	0.0
計(B)	99	273	591	—	437	—	1055	592	110	103	384	58	3702	100.0
%	2.7	7.4	16.0	—	11.8	—	28.5	16.0	3.0	2.7	10.4	1.5	100.0	
10,000まで	415	236	477	0	5	8	29	26	62	5	7	2	1272	
%	32.6	18.6	37.5	—	0.4	0.6	2.3	2.0	4.9	0.4	0.5	0.2	100.0	
+(B)	514	509	1068	0	442	8	1084	618	172	108	391	60	4974	
%	10.3	10.2	21.5	0	8.9	0.2	21.8	12.4	3.4	2.2	7.9	1.2	100.0	

の名と収集された場所，件数，内訳などをあげてみると，つぎのようになる。カッコ内の数字は本文末の附表1の AM 民具分類を示す。敬称略。

1938年

草間千代・草間このえ　新潟・長野　112件 (16)

結城二郎　広島　57件 (14, 15, 16, 21, 24, 25, 26)

馬渕東一　台湾　102件（11, 12, 13, 15, 21, 23, 24, 30, 90など）
古野清人・宮本馨太郎　サハリン　155件（11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 23, 24, 30, 61, 62など）
岡正雄・馬場脩　サハリン・千島　177件（11, 12, 13, 14, 15, 16, 22, 23, 24, 26, 30, 61, 62, 90など）
山尾薫明　インドネシア　83件（12, 13, 14, 15, 17, 30, 55, 65, 80, 90など）
染木煦　中国東北部・シベリア・長崎　349件（11, 13, 14, 15, 17, 23, 24, 25, 28, 30, 70, 90）

1939年

小林知生　中国東北部　67件（11, 12, 13, 14, 15, 16, 21, 65, 80）
馬渕東一　台湾　277（90）

1941年

石田英一郎　北海道・サハリン　60件（11, 13, 14, 17, 23, 24, 25, 26, 61）

1945年

鈴木棠三　マレーシア・シンガポール・ミクロネシア等　321件（11, 13, 14, 15, 17, 23, 30, 65, 90）

草間千代・このえ両氏の収集はアシナカ。古野・宮本両先生のは日本民族学会が派遣した調査隊によるもの。岡・馬場両先生の場合は日本列島とシベリアとの関係をさぐる発掘調査による出土品，馬渕・石田両先生は学士院時代のお仕事。小林先生も民族学研究所の調査隊によるものだった。今回とりあげた10,000番以後のものにははいらなかったが，河田杰氏の青森・秋田でのワラの履物（111件），うさぎ屋による山形・茨城のもの（漁具，運搬具など184件）がやはり第1期のものだった。

EMと同じ敷地にあった日本民族学会の附属研究所（民族学研究所）では14名の所員のうち4人がAMの旧同人だった。それも1940年には3人がやめ，結局AM関係者は宮本馨太郎先生だけになった。EMの運営はおおむね旧AM関係の所員を中心にしておこなわれていたから，それは宮本先生1人で孤塁をまもらねばならないことを意味していた。やがて1942年には文部省民族研究所とその外郭団体としての財団法人日本民族学協会がつくられ，EMは協会の附属となった。戦争の末期，EMの建物は学童疎開につかわれていたそうだし，物心両面にわたってEMには危機がおとずれた。それは敗戦によってもしばらくはかわらなかった。農地解放によるEM敷地の接収問題もそのひとつだったが，そのあいだにも標本資料の管理と整理がつづけられ，標本資料はおどろくほど完全な形でのこされた。EMの外側では復刊した『民族学研究』誌上で民族学の行き方をめぐって真剣な論争がかわされた。

b．第2期（1950年—1956年）

1949年秋の改組によって協会理事長に岡正雄先生がえらばれた。それをきっかけにしたかのように学界の動きは急速にあかるさをとりもどしていった。『民族学研究』は座談会「日本民族・文化の起源と系統」を掲載し，同じ問題についての論文を計画的にのせつづけたし，戦時中の旧植民地・占領地に関する我国の民族学者たちの研究をまとめる企画を組み，いっぽう海外調査のみちをとざされた研究者たちの目は国内にむけられ，密度のたかい，学会相互の壁を取りのけるような六学会（のちに九学会）の共同調査がくわだてられた。

そうした動きをうけて EM でも，この時期の1年目には二谷国松氏，二谷一太郎氏，二谷善之助氏によってチセ（主屋），倉庫，熊のオリ，厠などが建てられ，「保谷だより」（『民族学研究』誌上にもうけられた EM の広報誌面）のひとつとしてのせられた知里真志保先生の論文 [知里　1950: 74–77] とともに，おおくの人たちの関心をひきつけた。博物館では「保谷だより」のほか，独自に彙報，館報，利用者の人たちむけの解説書を出していた。

EM再開後の最初のまとまった標本資料はチセの建設につかわれたイナウや儀礼用の器など，二谷国松氏によってよせられたものだった。同じ頃，六学会の対馬の共同調査にともなって宮本先生が同地で集めたものが EM にもたらされた。翌51年には太田孝太郎氏と藤原三治氏の東北での収集品が原簿にのり，52年・53年には江上波夫先生，藤巻敏男氏による中国大陸の資料が EM によせられた。学会の連合による共同調査は能登，奄美，佐渡とつづくが，奄美では宮本延人先生，佐渡では古河静江氏が標本資料の調査と収集を手がけられ[2)]，1954年には沖縄戦災校舎復興期成後援会会長として沖縄にゆかれた渋沢敬三先生のお集めになった標本資料が原簿にみえるし，はじめての海外との標本資料の交換はデンマーク国立博物館とのあいだで実現した。それは Kaj Birket-Smith 博士のグリーンランド・エスキモーのものだった。

---

2) こうした調査や学会誌の特集にあわせて『民族学研究』誌上には新収資料ないし整理完了の標本資料の目録がのせられた。第2期では宮本馨太郎先生の「民族学博物館 収蔵 沖縄民具目録」(15巻2号)，民族学博物館「デンマーク国立博物館との資料交換，新収蔵 Nepal 土俗品目録，同 Peru 発掘品目録，沖縄土俗品の収蔵」(19巻2号)，同「奄美大島の新資料」(19巻3・4号) など。古河静江氏の民族学博物館学芸員としての収集は EM の最後までつづき，目録にあるだけでも385件以上にたっした。

1954　東京　33件 (12, 15, 16, 20, 21, 24, 25, 28)
1955　秋田，東京　49件 (13, 15, 16, 24, 30, 70)
1958　東京　37件 (12, 13, 14, 15, 16, 25, 62, 63)
1959　埼玉，東京，新潟，長野，岐阜　42件 (11, 13, 15, 16, 61, 68, 70, 80)
1960　青森，東京，神奈川，岐阜，鳥取　50件 (11, 15, 21, 27, 28, 62, 64, 70, 80)

1950年

二谷国松　北海道　51件（11, 14, 28, 62, 69）

宮本馨太郎　長崎（対馬）57件（24, 30）

1951年

藤原三治　岩手　38件（13, 15, 21, 22）

太田孝太郎　岩手　115件（11, 12, 13, 16, 22, 28, 61, 62, 63, 68, 69）

1952年

藤巻敏男　中国　77件（21, 23, 33）

宮本馨太郎　北海道　15件

1953年

宮本馨太郎　東京　45件（11, 12, 13, 14, 62, 63）

八幡一郎　新潟・長野　12件（12, 23, 30）

江上波夫　中国　32件（13, 14, 30, 68, 90）

1954年

渋沢敬三　沖縄　52件（13, 14, 15, 16, 21, 22, 24, 30）

Kaj Birket-Smith　グリーンランド　91件（12, 13, 14, 15, 24, 28, 30, 61, 64, 65, 80, 90）

1955年

宮本延人　鹿児島（奄美）51件（12, 13, 14, 15, 21, 24, 25, 30）

関敬吾　同上　8件

石田収蔵　サハリン　46件（11, 12, 13, 14, 15, 23, 30, 61, 62, 90）

第1期に EM をまもられたのは宮本馨太郎先生だったが，第2期は八幡先生，両宮本先生（馨太郎先生と延人先生）が協会の博物館担当理事として EM を軌道にのせられた。第3期，宮本馨太郎先生が文化財保護委員会専門委員として民俗文化財の保護の仕事や，立教大学総務部長の激職につかれたあとは，八幡先生が EM をもっぱら指導された。八幡先生のもとで，EMの資料の集まりはかつてない伸びを示し，博物館としてもっとも充実した時期をむかえた。

『民族学研究』には中根，川喜田両先生の海外での本格的な調査による報告が特集され[中根　1954; 川喜田　1954]，海外へのみちがひらかれる気配がみえはじめていた。EMの利用者，支持者も着実にふえつづけた[3)]。

c．第3期（1956年—1962年）

この時期の標本資料の累積をささえたのは，もちろん国内の標本資料も次第に増加したけれども，図3，図4のように，むしろ海外での収集，それも学術調査によるものだった。

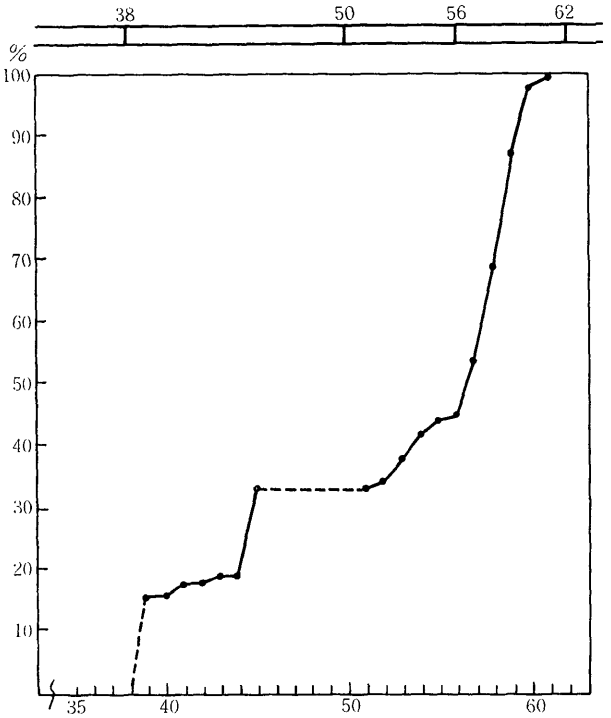

図3　1938年を起点としたEMの国外標本資料の累積

1957年に協会は第1次稲作民族文化総合調査団をタイ・ラオス・カンボジアなどのメコン河流域地帯におくり，第2陣をインドネシア共和国バリ島に派遣した。同じ頃にヒマラヤの地帯では川喜田先生を中心に西北ネパール学術探検隊が京都大学生物誌研究会と日本民族学協会の後援をえて活動していた。その成果はほどなく学会誌に，

3)　1936年10月のEMの展示はつぎのようだった（『民族学研究』20巻3・4号，p. 223)。
展示は第1室周囲諸民族の部と第2室の日本の民具の部とにわかれ，第1室では
a．1954年のデンマーク国立博物館との交換資料（グリーンランド・エスキモー関係)
b．1938年収集オロッコ・ギリヤーク関係
c．アイヌ文化関係
d．韓族，AM収集のもの
e．中国東北部での小林知生氏，江上波夫先生収集品
f．1953年マナスル登山隊民族班採集品
g．衣服
h．台湾高山族，鹿野忠雄氏収集品など
i．ミクロネシア染木煦氏収集品
j．インドネシア山尾薫明氏収集品
k．ペルー発掘品，天野芳太郎氏収集，額田巌博士寄贈品など
日本の民具（第2室）は
a．燈火関係用具（発火具・燈火具の変遷）　b．飲食関係用具（台所用具・食器など)
その他1945年に鈴木荘一氏，田中薫氏寄贈の刀・矢・槍・ブーメラン・仮面・アンコロンなど，東南アジア，中国，ニューギニアなどの収集品300点以上。
直接標本資料の保存管理や公開利用にたずさわる現場の人たちはもちろん，協会の事務系の人たちまで，その苦労はたいへんなものだった。今日のように地域博物館や民俗資料館の形は定着していなかったし，すべてが手さぐり状態だった。

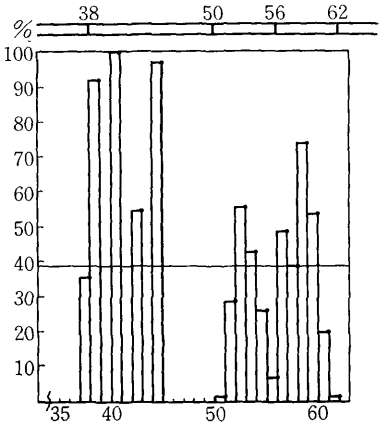

図4　各年次別国外標本資料の比重

あるいは単行本の形で［松本　1959；川喜田 1960］発表され，おおくの人たちの興味をひきおこした。

EMにもたらされたそれらの標本資料は，それが確実な調査にもとづいたものだけに，梱包をといて床にひらいただけで，その土地に暮らす人々の生活ぶりが目のまえに浮ぶような，すぐれたものだった。そこにはAM以来のアシナカの調査にみるようなある資料集中的な集め方ではえられない別の何かがあった。

AMから引きつがれた標本資料も含めて，

表3　AM民具分類によるEM標本資料の件数

年 ＼ CODE		10—20	20—30	30—40	40—50	50—60	60—70	70—80	80—90	90—100	計
1937—1942	内	465	219	65	1	2	52	3	10	5	822
	外	609	325	112	—	12	88	8	15	307	1476
	他	635	313	164	1	—	148	5	16	17	1299
1942—1947	内	1	2	2	—	2	22	—	—	—	29
	外	71	231	27	—	1	28	—	12	15	385
	他	1	—	—	—	—	1	—	2	—	4
1947—1952	内	75	120	20	1	2	98	—	2	7	325
	外	2	1	—	—	—	—	—	—	—	3
	他	32	23	1	—	—	23	—	—	6	85
1952—1957	内	211	109	62	1	2	53	10	9	17	474
	外	64	40	18	—	—	23	3	8	57	213
	他	11	2	—	—	—	2	—	—	4	19
1957—1962	内	350	293	57	—	2	88	37	185	7	1019
	外	505	330	124	—	—	223	27	75	35	1319
	他	40	24	8	—	—	27	3	276	9	387
1962	内	179	47	—	1	1	64	2	1	5	300
	外	3	—	—	—	—	—	—	—	—	3
	他	1	1	—	—	—	—	—	—	—	2
計	内	1281	790	206	4	11	377	52	207	41	2969
	外	1254	927	281	—	13	362	38	110	414	3399
	他	720	363	173	1	—	201	8	294	36	1796
合　計　(A)		3255	2080	660	5	24	940	98	611	491	8164
%	内	42.0	25.9	6.7	0.1	0.4	12.3	1.7	6.8	1.3	100.0
	外	34.5	25.5	7.7	—	0.4	10.0	1.1	3.0	11.4	100.0
	他	40.1	20.2	9.6	0.1	—	11.2	0.4	16.4	2.0	100.0
	(A)	39.9	25.5	8.1	0.0	0.3	11.5	1.2	7.5	6.0	100.0
1937—1942の%	内	56.6	26.6	7.9	0.1	0.2	6.3	0.4	1.2	0.7	100.0
	外	41.3	22.0	7.6	—	0.8	6.0	0.5	1.0	20.8	100.0
	他	48.9	24.1	12.6	0.1	—	11.4	0.4	1.2	1.3	100.0
1957—1962の%	内	34.3	28.8	5.6	—	0.2	8.6	3.6	18.2	0.7	100.0
	外	38.3	25.0	9.4	—	—	16.9	2.0	5.7	2.7	100.0
	他	10.3	6.2	2.0	—	—	7.0	0.8	71.3	2.4	100.0

EM の標本資料には国内，国外によっておおきな構成上の違いがみられる（表３）。とくに AM 民具分類でおおきな比重がおかれている衣食住関係の項目と生業関係の項目に該当するものを EM 収集のもののなかから拾いだし，各小項目の合計が項目全体のどれだけにあたるかを調べてみると，表４のようになり，AM 以来の研究の伝統があるせいか，国内では履物（16）の割合がきわめてたかく，食物の調理用具や食器，衣服の割合がほぼ似た数字になるのに対し，国外では食器（13）や調理用具（14），衣服（15）の割合がたかく，アクセサリー類（17）がそれらにつづき，履物（16）は５％にすぎないことがわかる。この国内では履物の割合がきわめてたかく，国外では食器，調理用具，衣服の割合がたかい傾向は地域不明のものについてもみられる。同じように生業関係の部門では，国内で漁具（24）の割合がたかいのに対し，国外ではこの分類の適用の仕方にもよるけれども，狩猟具（23）が，信仰関係の部門ではこの分類にいう偶像の類（61）や，幣帛類（62），祈願品（68）などに国内のものではたかい数字がみられ，国外では楽器類（64）の割合がたかく，あとの小項目は比較的似た割合となる。おそらく標本資料を集めた人たちの興味のおき方，やり方が

表４　EM 標本資料の分類別比重

A　衣食住関係　(%)

CODE / 地域	総数	11	12	13	14	15	16	17	18	19	計
国　内	1281	5.5	5.8	12.0	14.1	16.3	43.1	2.8	0.2	0.2	100.0
国　外	1254	10.4	3.2	20.8	25.3	20.1	4.7	12.8	0.6	2.1	100.0
不　明	718	9.7	5.0	12.4	7.8	19.2	42.5	2.5	0.6	0.3	100.0

B　生業関係　(%)

CODE / 地域	総　数	21	22	23	24	25	26	27	28	計
国　内	790	19.0	4.9	3.2	41.1	13.7	4.8	2.0	11.0	100.0
国　外	920	16.6	2.5	35.4	18.7	8.7	5.4	2.9	9.8	100.0

C　信仰関係　(%)

CODE / 地域	総数	61	62	63	64	65	66	67	68	69	計
国　内	377	36.6	26.8	6.1	3.9	1.1	1.1	1.1	17.2	6.1	100.0
国　外	362	28.4	8.6	7.5	22.1	12.7	0.8	0.3	9.4	10.2	100.0

違っていたためだと思われる。

この時期はまた，資料の整理や収蔵管理の方法がもっともととのえられた時期だった。AM 以来の方法は詳しさをまし，原簿には備考欄に使い方，作り方，言い伝えまで，できるかぎり詳しく記入されるようになったし，標本資料を集めてきた人たちに書きこんでもらうカード（A 5判ルーズリーフ形式，たいていは学芸員の人たちとの話しあいで記入したり，してもらったりする）には原名，訳名，一般的名称，採集地，採集年月日，採集者名，採集径路，購入価格，寄贈者名，製作地，製作者名，製作年月日，製法，製作法，材料，使用地，使用者，使用年代，使用法，分布，由来，備考の項目が印刷されていた。このカードの作り方や付け札・原簿とのつながりには必ずしも円滑にゆかない点があったけれども［中村　1971: 8–9］，それはのちに国内の有形民俗資料（有形民俗文化財），国内外の民族学的資料を集める際のひとつの有力なたたき台として役だてられた。

しかし，この時期の終り頃から EM では学術調査による大量の資料の整理や保管をめぐって，より適切な方策の必要が考えられはじめていた。大量の標本資料に（それは中小規模の博物館や資料館ならさしたる不便もないかもしれないが）AM以来の民具の整理法，管理法がどこまでたえられるかにはおおきな疑問があった。

第3期の1年目，1956年はどうしたわけか収集件数が80余だったが，2年目には田中薫氏収集の郷土玩具や桑田芳蔵氏の中国資料が一括しておさめられ，つぎの1958年には稲作民族文化総合調査第1次の分400余件，つづいて，西北ネパール学術探検隊の435，宮本延人先生，西村朝日太郎先生の稲作民族文化総合調査第2次の標本資料，江上先生のイランの発掘調査に附随した収集品，江口直人氏の半世紀にわたるコケシのコレクションなどが EM のものとなった。この時期の最後，したがって EM の最後の収集品は加藤玄智博士のお札のコレクション，それに潮田鉄雄氏の「はきもの博物館」の旧蔵資料だった。渋沢先生，八幡，宮本（馨太郎）両先生，諏訪の宮坂義雄氏の標本資料もかなりの数にのぼった。

1956年

渋沢敬三　中近東　4件（19，26）

1957年

田中薫　各地　99件（80）

桑田芳蔵　中国　84件（64，65，68，80）

1958年

江口直人　東北地方　297件（80）

渋沢敬三　神奈川・長野・兵庫　152件（13，14，24，25，27，28）

宮坂義雄　長野　51件（11，12，13，14，25，27，28，30，70など）
綾部恒雄　メコン流域　14件（15，22，64）
江坂輝彌　同　　上　24件（13，15，30）
岩田慶治　同　　上　38件（15，17など）
河部利夫　同　　上　11件（13，17，28）
松本信広　同　　上　23件（11，13，15，21，22，24，28，30，69）
清水潤三　同　　上　13件（13，22，28）
八幡一郎　同　　上 267件（11，12，13，14，15，16，17，18，19，21，22，24，25，26，27，28，30，61，64，70，80，90）

1959年

渋沢敬三　東京　50件（11，14，15，17，61，80）
鈴木二郎　マレーシア　14件（11，23，30，64）
西北ネパール学術探検隊　435件（11，12，13，14，15，17，19，21，23，25，26，27，28，29，30，61，63，64，70，90など）

1960年

渋沢敬三　東京・静岡　11件（24）
田中磐　長野　15件（70）
江上波夫　中近東　59件（11，14，15，17，21，30，61，64）
増田精一　同　上　20件（13，14，25，30）
八幡一郎　長野・宮崎・ハワイ　59件（12，13，14，15，24，25，30，64，70など）
宮本延人　バリ島　124件（13，14，15，17，21，24，25，28，30，61，63，69，80）
西村朝日太郎　同　上　25件（24）
中尾佐助　ブータン　28件（14，15，23，25，30など）

1961年

山尾薫明　インドネシアなど　30件（24）
篠遠喜彦　ポリネシア　12件（30ほか）

1962年

加藤玄智　東京その他　56件（61）
潮田鉄雄　東京・茨城・秋田・中国など　186件（15，16，21など）

こうしてさしも広かった収蔵庫も展示室もせまさを感じさせるようになり，同時に収蔵手段の老朽化がすすみつつあることが誰の目にもあきらかだった。

1962年11月16日，AM 以来の標本資料を含む EM のすべてが東京品川の文部省史料館に建てられた収蔵庫（いわゆる新館）に移された。文化財保護委員会が『民俗資料調査収集の手びき』をつくるのはそれから3年後。AM以来の民具に対する興味はようやく全国的なものになろうとしていたし，大学でも文化人類学（民族学）の講義がはじまり，民族学への関心は着実にたかまりつつあった。

Ⅳ. ま　と　め

1. EMの足どりを示す原簿によって，その収蔵標本資料がどのように増加していったかをみたところ，累積状況から3つの時期にわかれることがわかった。

2. 第1期は AM からの引きつぎ期。同時にこの頃から専門の民族学者による相当量の資料がよせられはじめ，EMの標本資料には日本国内各地から，そして旧植民地とその周囲の地域の資料がそろいはじめた。しかしそれは戦争によって中断されてしまった。

3. 第2期，戦後の混乱期をぬけて EM の動きがはじまった。とくに学会同志の共同研究による地域調査にともなう標本資料がまとまって EM におくられてきた。調査にもとづく密度のたかい収集が必要となっていた。

4. 第3期はそれ以前の2つの時期にはみられなかったはやさで標本資料の蓄積がすすんだ。そのもっともおおきな原動力は学会が推しすすめた海外学術調査で，すぐれた収集がおこなわれた。大量の標本資料をまえにして，AM 以来の標本資料の集め方，整理法，保存管理法は，ひとつの峠にかかろうとしていた。

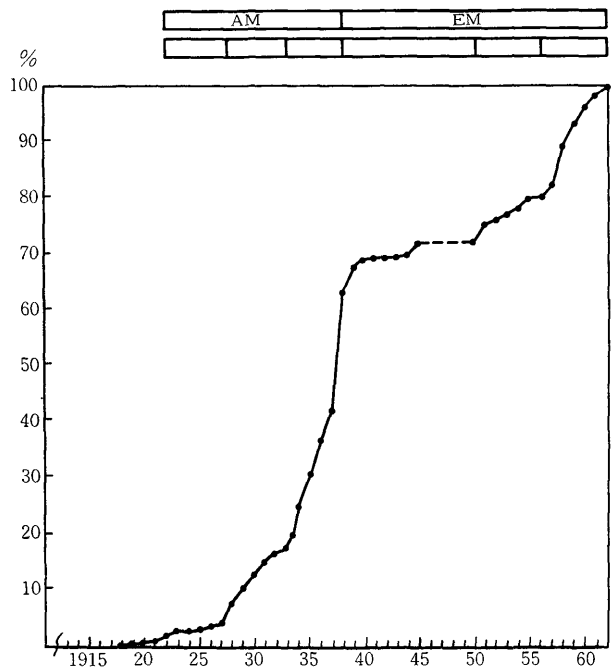

図5　AM·EM 標本資料の累積過程

5.　AM から EM の終りまで，原簿の10,000番以前に記入されている1938年収集のものを加え，全体の流れを追ってみると図5のようになる。ここでも年次を加えるごとに累積がどのようにすすんでゆくかを目やすにしてみる。

図5をもとにして改めて AM·EM を時期区分してみると，つぎのようになる。

a．第1期は準備段階にあたる1910年代の終りから1927年頃まで。それに AM 後期の1933年までの20年間。

b．第2期は1933年から1950年まで。旧植民地や国内の資料に加えて，たとえば東南アジアのものまでみられるようになる。

c．第3期は EM の2期と3期をいっしょにした時期で本格的な海外調査によって標本資料がもたらされはじめた時期。

6.　AM·EM を通して国内関係の標本資料をみると，集め具合は関東中心，ついで北陸，東北，中部がたかく，最終的には関東，東北がほぼ同じ割合となる。AM の第3期，EM の第2期，沖縄や奄美諸島ですぐれた収集がおこなわれたにもかかわらず，すくなくとも目録からみた数の上では，やはり東日本中心ということになる。

AM 民具分類の項目別では全体として衣食住関係が4割内外，生業関係は25%程度，運搬と信仰関係はそれぞれ10%ほどになる。ここで採用した衣食住重点主義の分け方にもよるが，40，50，70の項目についてはおおくの余白部分がのこされている。

謝　　辞

国立民族学博物館情報管理施設資料室，技術室，とくにコンピュータ処理のうえでお手数をわずらわした渡辺博，瀧山光男両氏に心からお礼を申し上げたいと思う。

文　　献

知里真志保
1950 「アイヌ住居に関する若干の考察」『民族学研究』14(4): 74–77。
石田英一郎
1959 「みんぞくがく（民族学）」『日本社会民俗辞典』4: 1404–1411。
川喜田二郎
1954 「Nepal における民族地理学的諸観察」『民族学研究』19(1): 1–57。
1960 『チベット人』角川書店。
松本信広編
1959 『メコン紀行』 読売新聞社。
宮本馨太郎
1973 『民具入門』 慶友社。
中根千枝
1954 「Tripura 州原住民に関する民族学的調査報告」『民族学研究』19(1): 58–99。
中村俊亀智
1971 「俗流管理論（下）」『文部省史料館報』15: 8–9。

附表1　EM 標本資料のための地域区分*

Ⅰ. 国内（47都道府県，略）1—47

Ⅱ. 国外

1. 東・中央・北アジア　51朝鮮半島　52中国（大陸部）　53中国（台湾）　54モンゴル　55サハリン　56シベリア
2. 東南アジア　61ベトナム　62ビルマ　63フィリピン　64タイ，ラオス，カンボジア　65マレー，シンガポール　66インドネシア
3. 南アジア，西アジア　71インド　72パキスタン　73スリランカ　74（欠）　75トルコ　76ネパール，ブータン　77アフガニスタン　78イラン，イラク　79その他
4. ヨーロッパ，アフリカ　81イギリス　82フランス　83ドイツ，オランダ　84北ヨーロッパ　85東ヨーロッパ，ソビエト（シベリア以西）　86スイス，オーストリア　87イタリア，スペイン　88アラブ連合，アルジェリアなど　89その他
5. アメリカ，オセアニア　91アラスカ，カナダ　92合州国　93中央アメリカ　94南アメリカ　95ミクロネシア　96ポリネシア　97オーストラリア，ニュージーランド　98ニューギニア　99その他

* EM の標本資料は国内，第2次大戦までの旧植民地，およびその周囲の地域から主として集められた。そのことを考えて EM で慣用的に用いていた区分にもとづいて，とりあえずこのような区分にした。

附表2　AM 民具分類*

1. 衣食住に関するもの　11家具　12燈火照明具　13調理具　14飲食具　15服物　16履物　17装身具　18出産・育児具　19衛生・保健用具
2. 生業に関するもの　21農具　22山樵具　23狩猟具　24漁撈具　25紡織・色染具　26畜産具　27交易具（金融を含む）　28その他（ウルシかき・木地屋・鍛冶屋などの用具）
3. 通信・運搬に関するもの（30）
4. 団体生活に関するもの（40　若者組関係の民具など）
5. 通過儀礼に関するもの（50　冠婚葬祭につかわれる民具）
6. 信仰・年中行事に関するもの　61神像・仏像・お札など　62幣帛　63祭供具　64楽器　65仮面　66呪具　67卜占具　68祈願品　69その他
7. 娯楽・遊戯に関するもの（70）
8. 郷土玩具・縁起物（80）
9. その他（90　武器など）

* AM 編『民具蒐集調査要目』(1936) をもとにし，その後の AM, EM の標本資料の集り具合を考えて，表し方をかえた部分が多い。とくに AM のもとのままでは EM の処理にむかない部分があるので最後にその他の項を加え，そこに民具以外の武器や動植物標本などの収集品をいれた。また各項目には，とりあえずコードを与えた。